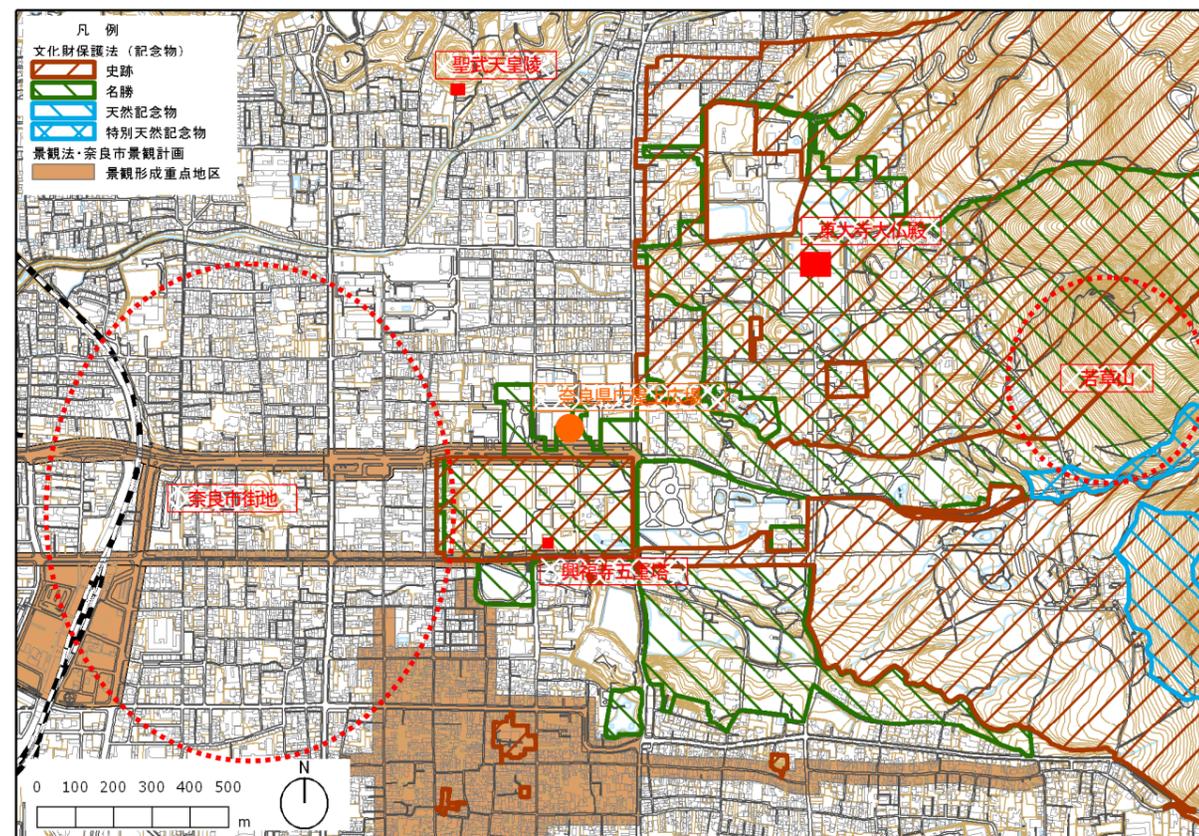
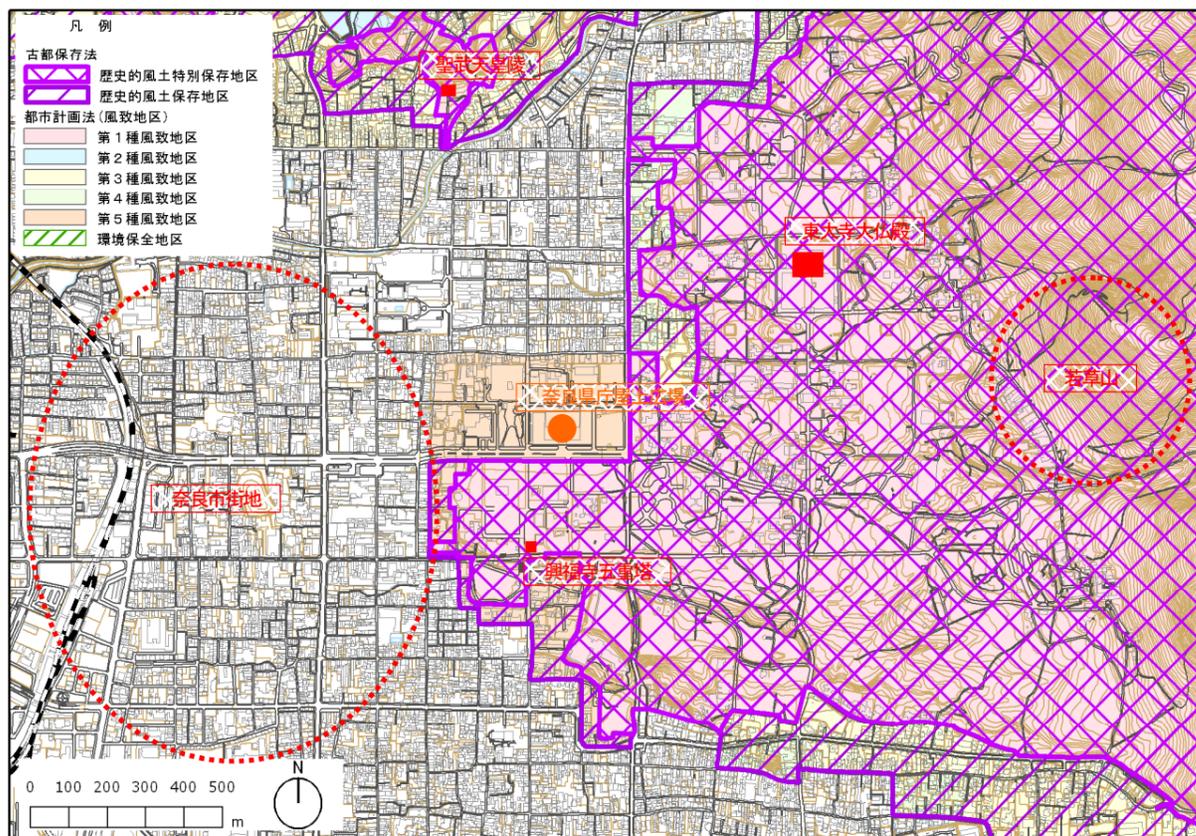
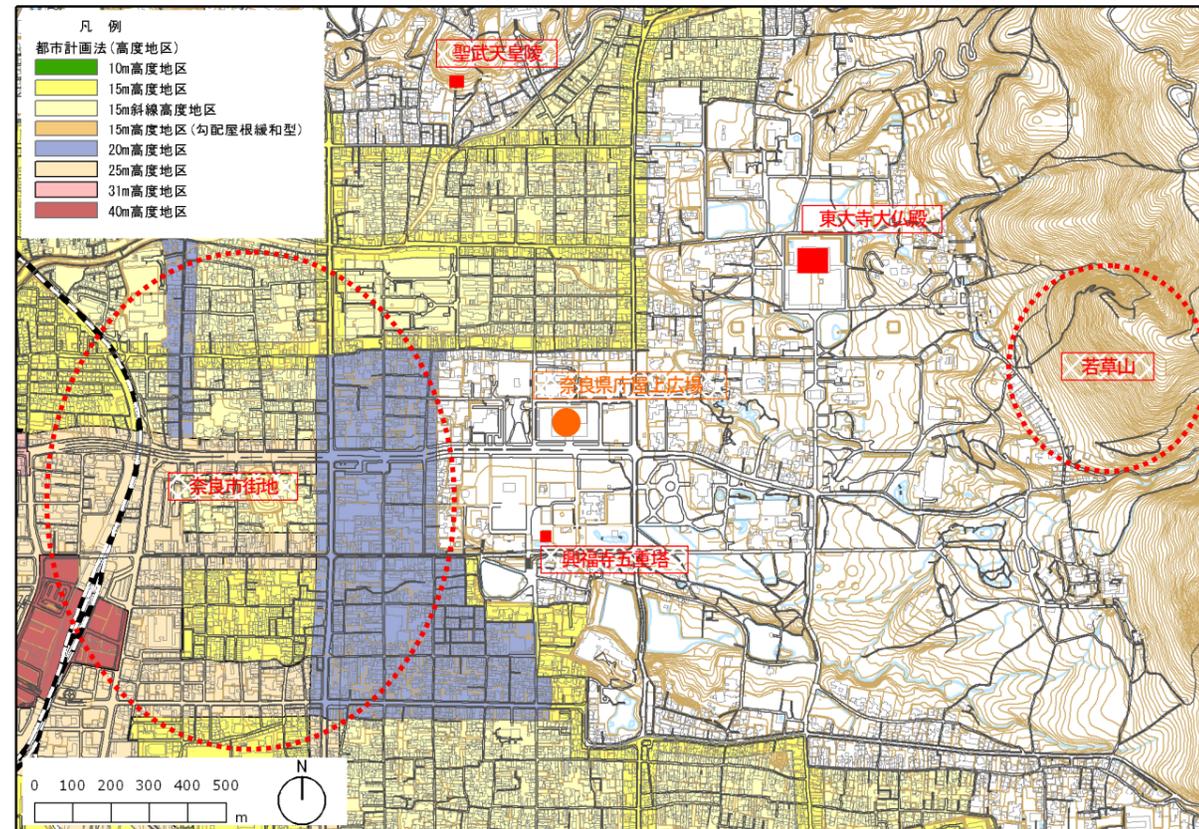
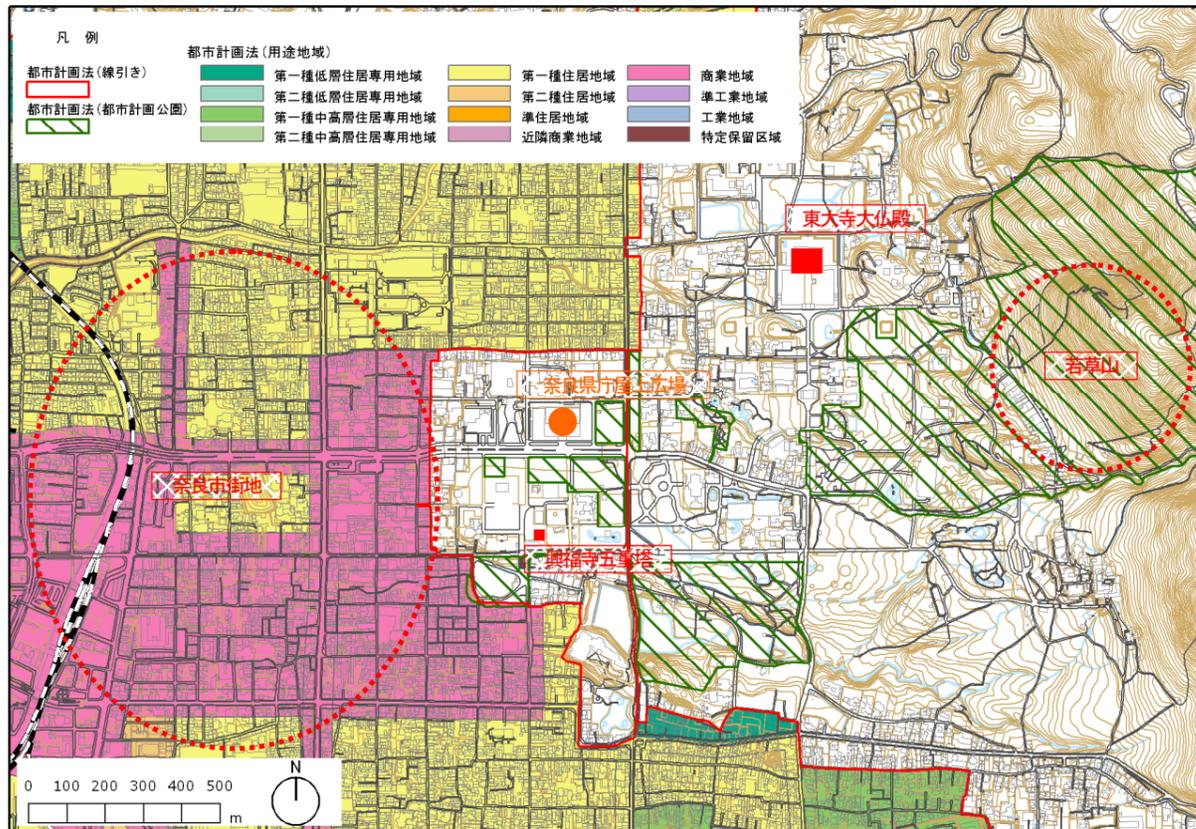


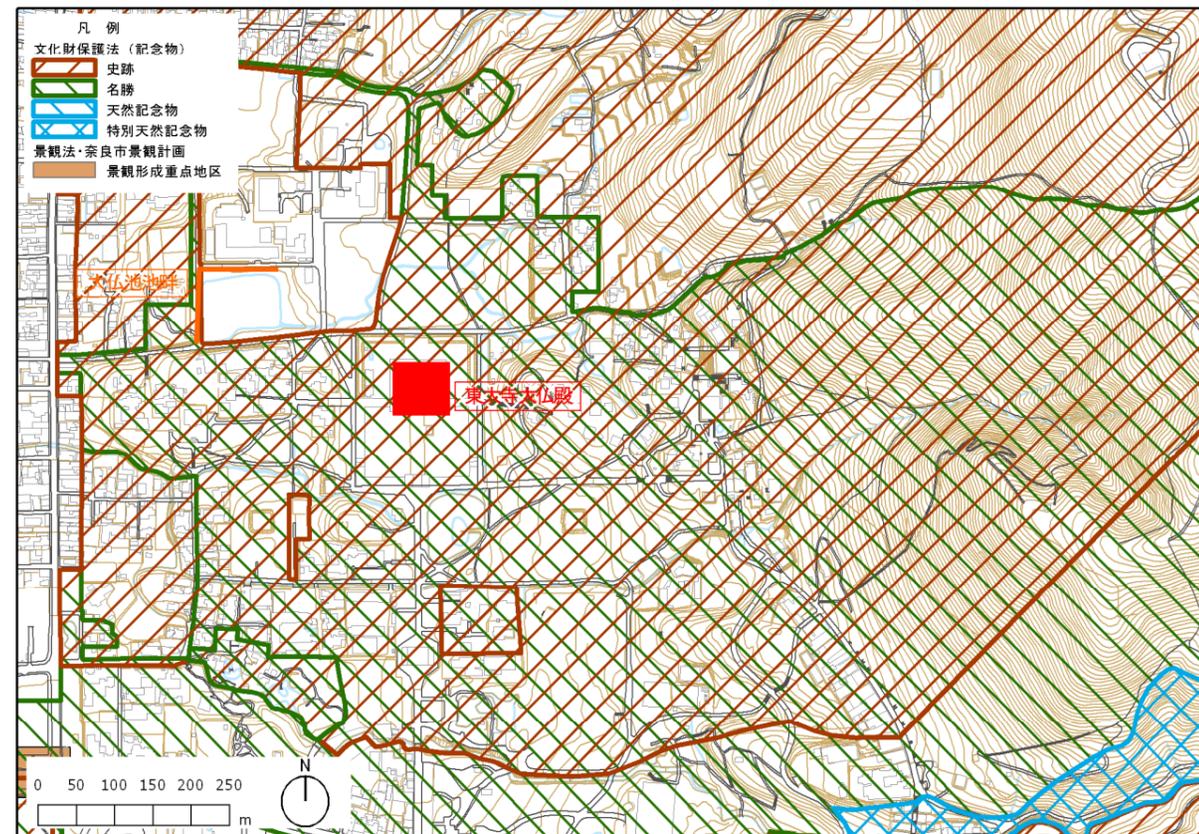
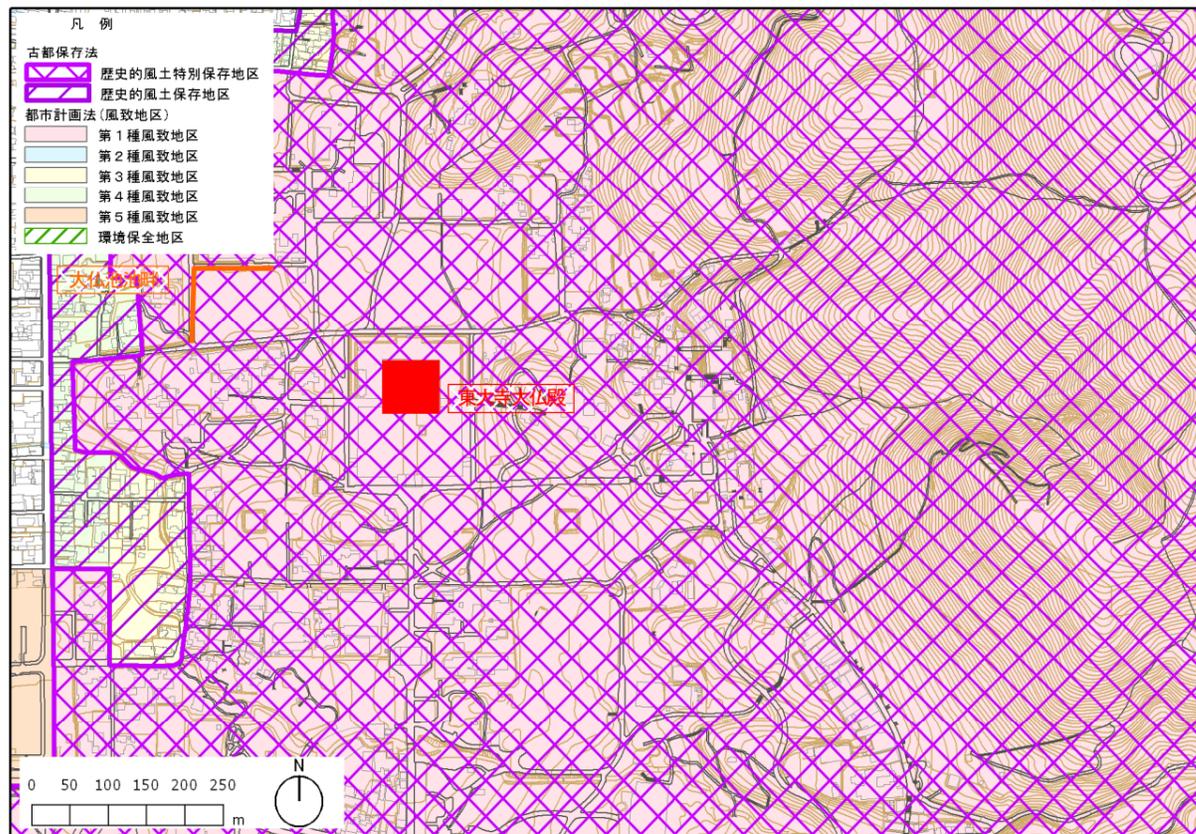
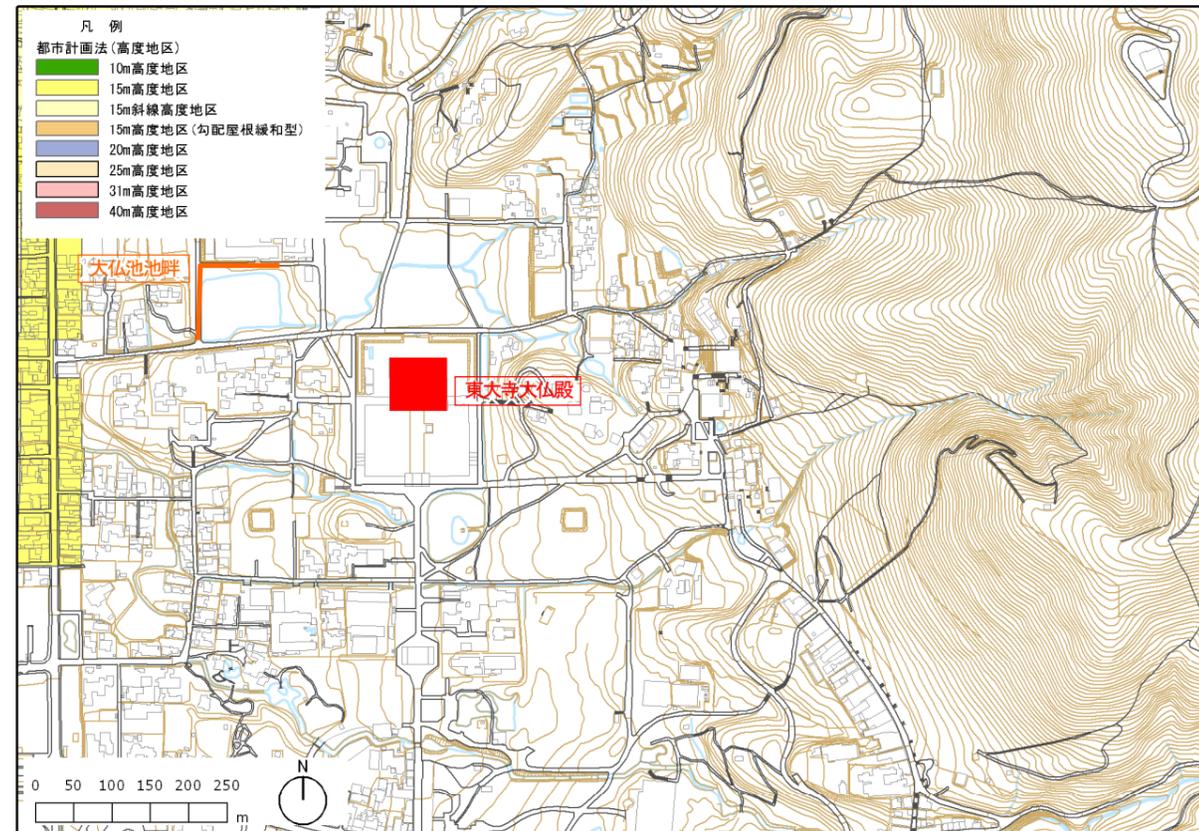
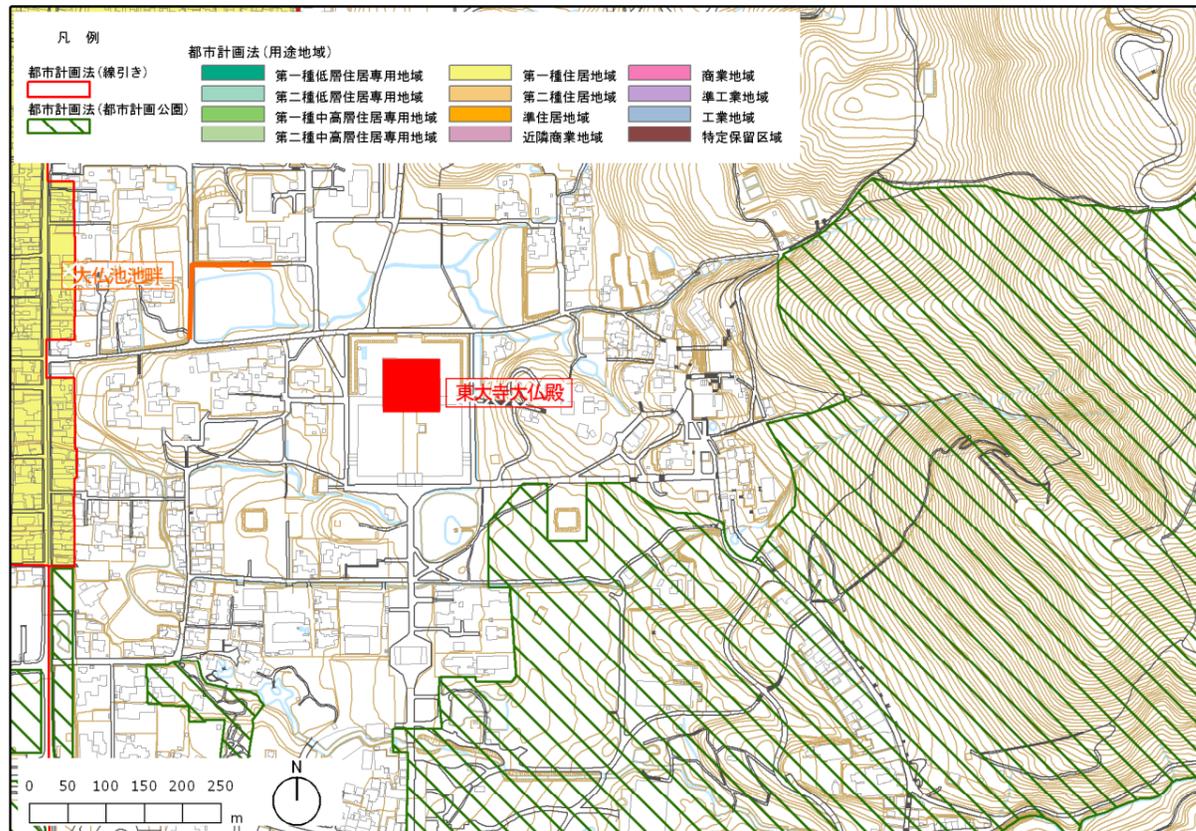
No. 1 奈良県庁屋上広場から奈良市街地、山並み、社寺等への眺望		類	型	I : 見下ろし型眺望景観
				奈良県庁屋上広場
<p>目に見える景観の特性</p> <p>若草山、春日山などの山並みを背景に、数多くの歴史文化遺産が分布する市街地が広がり、歴史的風土を創り出している。360度の視界が広がるため、風水思想をもとに築かれた平城京とそれを取り巻く聖武天皇陵や若草山等の山々、平城京左京に配され、その後の奈良の発展に深く関わってきた東大寺、興福寺を一望できる。</p>		<p>眺望空間</p> <p>近景 【東側】 樹林 【西側】 奈良市街地 【南側】 樹林 【北側】 奈良市街地</p> <p>中景 【東側】 東大寺大仏殿、樹林 【西側】 奈良市街地 【南側】 興福寺五重塔、樹林 【北側】 聖武天皇陵、樹林</p> <p>遠景 【東側】 若草山等の山並み 【西側】 生駒山系の山並み 【南側】 奈良市街地 【北側】 市街地、山並み</p>		
<p>心で感じる景観の特性</p>	<p>歴史的背景</p> <p>奈良県庁舎 昭和40年(1965)、片山光生設計により建築された。景観論争を呼んだ建築である。 奈良市街地 和銅3年(710)の平城遷都により築かれた平城京を基盤として、発展・成熟してきた。平城京は風水思想にもとづき築かれ、東西北を山々に囲まれている。 若草山 山容が菅笠の形をし、3つの嶺が重なったようにみえることから、通称的に「三笠山」とも呼ばれてきた。若草山の名は「伊勢物語」で在原業平が「むさし野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」と歌ったことに由来するとも言われている。東大寺山堺四至図によると、元々は樹木の茂った山であったことがわかる。山頂には前方後円墳である史跡鷲塚古墳があり、鷲山とも呼ばれる。</p>	<p>守るための視点</p> <p>東側、西側、南側の樹林は歴史的風土保存区域、風致地区、名勝及び都市公園区域として保存が図られている。また、東大寺大仏殿及び興福寺五重塔は国宝に指定され、保護されており、若草山は、名勝奈良公園、史跡東大寺旧境内、第一種風致地区や歴史的風土特別保存地区等により保護されているため、視対象については、新たな保全施策は求められない。ただし、都市公園施設の整備等の際は、高さ・規模・形態・意匠などの配慮が求められる。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) C-1</p>		
	<p>民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承</p> <p>若草山 毎年1月に、「若草山の山焼き」が行なわれる。若草山の山焼きの起源には、若草山山頂にある鷲塚古墳の鎮魂のためという説や若草山を年内もしくは翌年の1月頃までに焼かなければ不祥事が起こると考えられていたためという説、東大寺と興福寺との領地争いがもとであるという説、春の芽生えをよくするための原始的な野焼きの遺風を伝えたものであるという説などの諸説がある。 春季になると一帯では谷間に鷲の鳴く声が聞こえたことから以下の歌が歌われている。 「今もなほ 妻やこもれる 春日野の 若草山に うぐひすの鳴く」(中務卿親王「夫木抄」) 「すたつとも みゑぬものから 鷲の 山のいろいろ ふみも見ろかな」(「宇津保物語」) 平城京・春日山 万葉集にも多く詠まれている。 「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」(万葉集3-328、小野老) 「たち変り 古き都と なりぬれば 道の芝草 長く生ひにけり」(万葉集6-1048、田辺福麻呂歌集) 「秋されば 春日の山の 黄葉見る 奈良の都の 荒るらく惜しも」(万葉集10-1604、大原真人今城)</p>	<p>整えるための視点</p> <p>北側への眺望の背景に、旧奈良ドリームランドの工作物が映り込んでおり、今後の跡地利用のあり方を含めた景観阻害要素の改善の検討が求められる。 奈良奥山ドライブウェイ周辺の森林において遠景で赤茶色に変色した立ち枯れが見られる。樹林の適切な管理が求められる。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) F-1, I-1</p>		
	<p>眺望景観の構成要素の関 係</p> <p>奈良県庁舎と奈良市街地 風水思想にもとづき築かれた平城京の地形構造を感じとることができる。かつての景観論争の末に名勝区域内に建設された県庁を視点場とし、低層で抑えられた奈良市街地とランドマークとなる歴史文化遺産等から奈良の景観について考えさせられ、その大切さを感じられる。 若草山と奈良市街地・東大寺・興福寺 若草山は、諸説ある山焼きの起源から、奈良市街地と若草山の関係や東大寺・興福寺との関係を感じられる。各県庁屋上広場からは、奈良市街地、東大寺、興福寺、若草山を一望できる。 東大寺大仏殿と聖武天皇陵 東大寺大仏は聖武天皇により造像が発願された。東大寺大仏殿と聖武天皇陵を一望できる。</p>	<p>活かすための視点</p> <p>奈良県「まほろば眺望スポット百選」に選定され、奈良の景観地図にもあげられているおり、多くの人に知られているといえる。また、県庁の屋上として公開され、視点場としても整備されており、新たな視点場整備は求められない。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) —</p>		
<p>情報としての景観の特性</p>	<p>名所案内記 絵 図 等</p> <p>東大寺・興福寺・若草山・春日山等 「大和国細見図」(享保20年(1735))、「大和名所図会巻ノ一」(寛政3年(1791))、「いんばんや絵図」(明治3~15年(1870~1882))、「奈良名所細見図」(明治24年(1891))など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。</p> <p>インベントリ</p> <p>奈良県本庁舎 「公共建築百選」に選ばれている。 東大寺・興福寺・春日山原始林 世界遺産として多くの人に知られている。また、奈良は、「わたしの旅100選」や「日本遺産・百選」「新日本観光地百選」などに選定されており、その構成要素としてあげられる。 若草山 若草山を含む奈良公園は、「日本の歴史公園100選」「日本の都市公園100選」に選定されている。また、若草山の山焼きは「人と自然が織りなす日本の風景百選」に選定されている。</p>	 <p>四禽図に叶い、風水思想に基づき建設された平城京</p>		

法的位置付け



No. 2 大仏池池畔から東大寺大仏殿への眺望		類	型	IV：境内・史跡型眺望景観
 		視 点 場	大仏池池畔	
		視 対 象	東大寺大仏殿	
		眺望空間	近 景	大仏池、樹林
中 景	東大寺大仏殿、樹林			
遠 景	若草山等の山並み			
目に見える景観の特性		<p>近景の大仏池の水面が、広がりのある眺望景観をつくりだすとともに、東大寺大仏殿を水面に映す。東大寺大仏殿と周辺の樹林、大仏池、遠方の山並み等の自然環境が一体となった歴史的風土を創り出している。また、紅葉の季節には、銀杏とのコントラストが大仏殿の豊をより一層美しく際立たせる。</p>		
心で感じる景観の特性	歴史的背景	<p>大仏池 「多門日記」によると、天正17年(1589)、油阪・芝辻村の用水のため上下両池を造ったと記されている。大正13年(1924)、正倉院の防火用水池として上下両池は一つの池に改修された。</p> <p>東大寺大仏殿 正式には東大寺金堂という。奈良時代の大仏殿は、治承4年(1180)の平重衡などの南都焼討によって焼失している。建久6年(1195)の再建時の落慶法要には源頼朝なども列席した。永禄10年(1567)の三好・松永の戦いによって再度焼失したが、公慶上人の尽力や徳川綱吉の寄進などにより、宝永6年(1709)に落慶した。これが現在の大仏殿であり、現在でも世界最大級の木造建築である。</p>		
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	<p>東大寺大仏殿 「平家物語」では、治承4年(1181)の平重衡などの南都焼討によって東大寺大仏殿が焼失した様子が描かれており、東大寺大仏殿のわが国の歴史のなかでの重要性を物語る。</p> <p>「大仏殿の二階の上には千余人のぼりあがり、敵の続くをのぼせじと、橋をばひいてけり。猛火はまさしうおしかけたり。おめきさけぶ声、焦熱・大焦熱・無間阿毘の炎の底の罪人も、これにはすぎじとぞみえし」</p> <p>また、和辻哲郎は「古寺巡礼」のなかで以下のように記している。</p> <p>「大仏殿の屋根は空と同じ蒼い色で、ただこころもち錆がある。それが朧ろに、空に融け入るように、ふうわりと浮かんでいゝ。その両端の鴟尾のほのかに、実にほのかに、淡い金色を放っているのが、拝みたいほどありがたく感じられた。」</p>		
	眺望景観の構成要素の関 係	—		
情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	<p>東大寺大仏殿 「大和国細見図」(享保20年(1735))、「大和名所図会巻ノ一」(寛政3年(1791))、「いんばんや絵図」(明治3~15年(1870~1882))、「奈良名勝案内図」(大正14年(1925))など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。</p>		
	インベントリ	<p>東大寺 世界遺産として多くの人々に知られており、南都七大寺のひとつでもある。また、奈良は、「わたしの旅100選」や「日本遺産・百選」「新日本観光地百選」などに選定されており、東大寺はその多くで構成要素のひとつとしてあげられる。</p>		
		守るための視点	<p>東大寺大仏殿は、国宝として保護されているため、視対象については、新たな保全施策は求められない。また、視点場及び眺望空間についても、名勝奈良公園、史跡東大寺旧境内、第一種風致地区、歴史的風土特別保存地区等として保存が図られているため、新たな保全施策は求められない。ただし、都市公園施設の整備等の際は、高さ・規模・形態・意匠などの配慮が求められる。</p> <p>(施策の方向性) C-1</p>	
		整えるための視点	<p>奈良奥山ドライブウェイ周辺の森林において遠景で赤茶色に変色した立ち枯れが見られる。樹林の適切な管理が求められる。</p> <p>(施策の方向性) I-1</p>	
		活かすための視点	<p>奈良県「まほろば眺望スポット百選」に選定されており、奈良の景観宝地図にもあげられている。また、公募により推薦された眺望景観であり、多くの人に知られているといえる。また、奈良公園区域内であり、多くの人が自由に、また安全に眺望景観を享受できる場となっており、新たな視点場整備は求められない。</p> <p>(施策の方向性) —</p>	

法的位置付け



No. 3 東大寺二月堂裏参道から東大寺二月堂への眺望		類	型	III：見通し型眺望景観	
 		視 点 場	東大寺二月堂裏参道		
		視 対 象	東大寺二月堂		
		眺望空間	近 景	石畳・石段、土塀・練塀、庭木・樹木	
			遠 景	(観音山、空)	
目に見える景観の特性	<p>近景から中景にかけて、院・塔頭等の塀（石積及び土塀・練塀）と参道の石畳、石段、庭木が連なり、これらの歴史的要素が軸線を形成し、アイストップとなっている東大寺二月堂の象徴性を高めている。また、東大寺二月堂の背景には観音山の樹林や空が遠景を構成している。</p> <p>お水取りの時期には二月堂の松明に照らされた幻想的な眺めとなり、春には木蓮の花越しにより一層美しく望むことができる。</p>				
心で感じる景観の特性	歴史的背景	<p>東大寺二月堂 平重衡の兵火（1180）、三好・松永の戦い（1567）の2回の戦火には焼け残ったが、寛文7年（1667）のお水取りの最中の失火で焼失している。2年後に江戸幕府の援助を得て、従前の規模・形式を踏襲して再建されたものが現在の建物である。</p>			
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	<p>東大寺二月堂 法会「修二会」は「お水取り」とも呼ばれており、大仏開眼供養会の行なわれた天平勝宝4年（752）に始められ、現在まで一度も途絶えることなく続けられている。</p> <p>司馬遼太郎は「奈良散歩」のなかで、文化の定義を「その集団を特色づける歴史的な神聖慣習」と仮定し、そのような意味では「東大寺における「文化」は修二会（お水取り）によって決定的に代表される」と記している。</p> <p>東大寺二月堂裏参道からの東大寺二月堂への眺望 写真家入江泰吉は、「この参道のものさびた光景こそ、いかにも古都奈良らしい情感が漂うたたずまい」と、何度も撮影をしている。入江泰吉の写真「春めく二月堂裏参道」を契機に、現在、多くの人々が訪れる観光スポットとなっている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">二月堂裏参道からのお水取りの風景</p> <p style="text-align: right;">入江泰吉「春めく二月堂裏参道」(出典：奈良市写真美術館編「やまと余情」)</p>			
	眺望景観の構成要素の関 係	<p>東大寺二月堂と院・塔頭 奈良には院・塔頭が数多くあり、それらが様々な趣向を凝らした庭をもっている。江戸初期頃と見られる「東大寺寺中寺外惣絵図」には50を超える塔頭がみられる。東大寺二月堂裏参道から東大寺二月堂への眺望景観を構成する塀や庭木の一部は、東大寺塔頭である中性院、寶珠院のものであり、特に寶珠院は近世二月堂の管理の任を負うなど、東大寺二月堂との関わりの深い塔頭である。東大寺二月堂とそれを支えた院・塔頭とが一体となった宗教文化を感じられる眺望景観である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○東大寺中性院：住職は第220世東大寺別当であり、平成22年（2010）修二会の練行衆にも名を連ねる。本尊は木造弥勒菩薩立像（国指定重要文化財）。泥土と瓦の練塀が美しい。 ○東大寺寶珠院：近世初頭に堂衆方子院として創立。近世には、東大寺二月堂の管理の任を負っており、二月堂修二会にかかわる記録、堂衆独自の法要等の記録が多く伝えられている（現在は東大寺図書館寄託）。 			
情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	<p>東大寺二月堂 「大和国細見図」（享保20年（1735））、「大和名所図会巻ノ一」（寛政3年（1791））、「いんばんや絵図」（明治3～15年（1870～1882））、「奈良名勝案内図」（大正14年（1925））など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。</p>			
	インベントリー	<p>東大寺 世界遺産として多くの人々に知られており、南都七大寺のひとつでもある。また、奈良は、「わたしの旅100選」や「日本遺産・百選」「新日本観光地百選」などに選定されており、東大寺はその多くで構成要素のひとつとしてあげられる。</p>			
		守るための視点	<p>東大寺二月堂は、国宝として保護されているため、視対象については、新たな保全施策は求められない。また、視点場及び眺望空間についても、名勝奈良公園、史跡東大寺旧境内、第一種風致地区、歴史的風土特別保存地区等として保存が図られているため、新たな保全施策は求められない。しかし、とりわけ軸線を形成する石畳・石段や石積み・土塀・練塀、庭木・樹木などの要素については、適切な修理・修復・管理が求められる。また、都市公園施設の整備等の際は、高さ・規模・形態・意匠などの配慮が求められる。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) C-1, D-1, E-1</p>		
		整えるための視点	<p>眺望景観を阻害しているものはみられないため、特段の再生施策は求められない。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) —</p>		
		活かすための視点	<p>奈良の景観宝地図にあげられており、公募により推薦された眺望景観でもある。入江泰吉の写真によって有名になり、多くの写真家・観光客が訪れており、多くの人に知られている。視点場を構成する石畳・石段、土塀・練塀などは良好に保全され、現在も歴史的な風情のある視点場を形成しているため、現状を維持していくことを旨とし、新たな視点場整備は求められない。</p> <p style="text-align: right;">(施策の方向性) —</p>		

法的位置付け

